
神野悪五郎・只今参上仕る！！

千石御堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神野悪五郎・只今参上仕る！！

【Nコード】

N5019E

【作者名】

千石御堂

【あらすじ】

毎日を平凡に過ごしていた八雲の前に突然現れたのはなんと魔王・・！？魔王・神野悪五郎と八雲コンビの繰り広げる非日常な日常の物語。

序

「はあ？妖怪？なんじゃそりゃ？」

「妖怪よ、妖怪。アンタまさか妖怪も知らないの？」

「バカ、知ってるよ。あのヒュードロオツて奴だろ？」

「ばっか違うわよ、オバケよ、オバケ。化物のことよ」

「違うないだろ？」

「んー・・・そういわれると・・・い、いやそんな事ないわよ！幽霊と妖怪じゃ全然違うじゃない！！」

「どう違うんだ？」

「・・・そういわれると確かに苦しいわね・・・」

「「ねえ、ヤクモはどう思ってるわけ？」」

「え・・・な、何・・・？」

突然二人の友人から切り出された所為か、寝ぼけ眼に奮いをかけられた所為か、少し怯えた表情で八雲は二人を見た。

「だあ、かあ、らあ！例の旧校舎に”出る”って言われてるアレのことよ！」

短髪の少女　水葵に再び喝を入れられ、漸く八雲は二人の話を飲み込めた。

「あ、ああ　・・・あのオバケの噂の事ね・・・」

片田舎にポツンと構えた菖蒲市立第二中学校の間でもつか噂になり始めたオバケの噂は、丁度三月の中旬頃から囁かれ始めた。

（先生曰く）とある事情によって取り壊しが出来ていない旧校舎に
”出る”と言うのだ。

二年生の問題児、中浦と笹嶋が”見た”と言う。

彼らの言い分によると、なんでも巫戯けて旧校舎の中に忍び入った
際に、教室の中で蠢く”真っ黒い何か”を確かに見たと言うのだ。

勿論、教師がその話を信じる訳もなく、二人を厳しく叱り、旧校舎
に出入り出来ぬ様、厳重に閉ざした。

だが、人の噂に何とやらと言う奴で、先生の努力空しく、旧校舎の
オバケの噂は生徒達の間で今最も時めく熱い話題へと様変わりして
しまったのだ。

元々田舎の学校なためか、大した娯楽もない田舎の学校の中ではあ
つという間にオバケの話で持ちきりになった、と言うわけだ。

「ヤクモ、お前はと思う？やっぱ、アレって、アレかな。その

」

目の前の少年は神妙な顔で、八雲に問いかけた。

八雲は大きく溜息をつく、と、ゆっくりと問いに答えた。

「何言ってるの？バーカ、そんなの、いるわけないじゃん」

そう。

この世にそんなモノなんてありはしないのだ。

第一話 悪五郎、参上（1）

「ヤークモーツ！！早くしろよ、先公が来ちまうだろ！？」

「ねえ、直樹ーホントに行くの？」

「当ったり前だろ、もう決めたじゃんか」

そう言うと、友人はオンボロ戸板を開き暗がりの旧校舎へと消えていった。

「ねえ、直樹・・・そのオバケ出る部屋って何階なの？」

最後に戸板からよじ登って来た水葵が直樹に聞いた。

「えーと・・・何処でしたっけヤクモ君」

「・・・自分が誘った癖に忘れるなよ・・・」

「ま、まあいいじゃんかよ。で、何処だっけ？」

「3階の突き当りだろ？」

そもそものきつかけは水葵が仕入れた来た情報が始まりだった。

「旧校舎に入れるウ？」

真っ先にトンチキな声を上げたのは直樹だった。午後の昼休みに入って、女子から水葵が聞いてきた話を僕らが聞いた、というわけだ。「それがね、どうも旧校舎の裏手の非常口みたいな戸板だけ少し脆

くなつて、少し力を入れれば、簡単に開くんだって。2組の佐渡島達が発見したみたいよ」

「あの寅さんがか？」

佐渡島とは、隣の組、一年二組の佐渡島寅のことである。

その名から皆に「寅さん」とか何とか呼ばれている事ぐらいは辛うじて知っているが、何分面識が無いし、本人が無口なため、すぐにはピンと来なかった。

「あの石地蔵みたいなのがそんなこと教えてくれんのか？」

「いや、皆もいたから分かったんだけどね。どうも戸板がぐらついてたみたい。それで」

「成る程、それで触って見たら開いたってわけ」
最後を僕が結んだ。

「そういうこと。それで今度また中浦と笹嶋が見に行くみたいよ」

「そうか。」

暫しの沈黙の後、急に直樹が口を開いた。

「そうか　　って何が？」

「そうか！ははははは！！」

急に狂ったように直樹が高笑いを始めた

「ねえ・・・もともとバカだとは思ってたけど・・・とうとう・・・」

「バカ、違いよ」

水葵の心配そうな声を慌てて振り払った後、直樹ゆっくりと口を開いた。

「　　なあ、俺達で行ってみないか？」

「「はあ？」」

「いや・・・だからさ、俺達だけで行かないかい？っていうその・・・」

「えー？あたしやだよ？そんなトコ行くのー」

取り敢えず真っ先に水葵が反論した。

「俺もあんま行きたくないかな」

続いて僕も反論する。普段ならこれで二対一で可決される筈だった。

ところが、だ。

「あんだよお前らさーっ！おいヤクモーツ！俺達親友じゃねえかー！！なんでいつもいつも水葵の肩持っんん？」

直樹はそこまで言っただけで急に口を噤み、なにやらいやらしい表情を浮かべた。

「もしかして、お前ら・・・デキてるんじゃ　おはっ！！」

直樹の下らない邪推もそこまでだった。水葵のアップパーカットをもろに顔面に食らったからである。

「て、てめえコノ水葵！！何しやが」

「あんたがバカなことほざくからでしょ。バーカ」

「さ、さっきからバカバカってこの」

「バカにバカって言っただけが悪いのよ！」

どうやら直樹の堪忍袋もそこまでだったらしい。漫画の世界ならここでブチッという効果音がしたことだろう。

「おーし分かった！！もうこうなったら皆にお前らが付き合ってるって触れ回っちゃうもんね！！」

「バカ、やめなさいよ！」

「また、バカって　！！みっつなさーん！！水葵とヤクモは付き

合っ　　むぐっ！！！」

　　またも直樹の言葉は最後まで言い終わらぬ内に阻止された。僕が止めたのだ。

「わかったよ、行けばいいんだろ？」

仕方が無い。僕は腹を括った。こうでもしないと本当にこの男はやりかねない。

「マジで？やっぱお前最高だわぁ！」

「わかったからひつつくな、暑苦しい」

八雲は抱きついてきた直樹を引っ剥がした。

「ちょ、ちよつと八雲、ホントに行くの？」

「だって行かないと何時までもしつこいだろ？・・・まあ行って帰ってくるだけなら別にいいだろ」

こうして、今に・・・至るわけなのである。

全く、迷惑な話だ。

第一話 悪五郎、参上（2）

「中は結構暗いんだな・・・」

直樹が最初にぼやいた言葉である。直樹のぼやきどおり、中は薄暗い上に埃まみれで、おまけに天井にはそこかしこに蜘蛛の巣が張っている。そのせいか、短く刈り上げた直樹の髪は塵芥のせいで白子のようになっている。

「いかにも出そうって感じだよね」と、水葵。

水葵のショート・ヘアも天井から降る塵芥のお世話になり白みがかっている。

二人を見比べた八雲は自分の頭を少し掻き毟った。

旧校舎の中は意外と広く、取り壊された一部分にしては、今でも使えそうな部分が随所に見られた。完全に使われなくなる前は分館として、資料等が置かれたいたらしい。田舎の学校にしては、随分と無駄な拵こしらえではある。

「それで水葵、出るのは何処だったっけ？」

みしみしと厭な音を立てる木造階段を登りながら、直樹が聞いた。

「だからあ、三階の奥よ。・・・あんだ本当に物覚え悪いわね」

「いや、そうじゃなくてさ・・・三階の奥って何処？」

「え・・・それは・・・ねえヤクモ」

「知らないよ、水葵が聞いてきたんだろ」

「え、いやでも、あくまでも他人から聞いた噂を聞いただけだから・
」

「えゝ!? 知らねえのかよオ!!」

直樹が大きな声を出して立ち止まった。

みしっ・・・という大きな音と共に直樹の声が校舎中に反響し、轟
いた。

しらねえのかよおお・・・

しらない・・・・・・・・

しらない・・・・・・・・

声は段々と不気味な呻きへと変調していくような感覚がした。

勿論、そんなことはありえないのだが。

放課後を過ぎた学校の昼は輝きを失い、いつしか夜の闇が交じり合
う夕闇へと姿を変えていた。一日の終わりを知らせる鴉の啼く声が
何処からか乾いた音で聴こえてくる。

なんだか、無性に

気味が悪くなってきた。

二人も同じ気分だったのだろう。

「ねえ・・・さつと見て早く帰ろうよ、ここ、空気悪いし・・・」
と水葵。

「うん、そ、そうだな・・・」と珍しく水葵に同意の直樹。
三人の意見は明らかだった。

この校舎三階の”一番奥”とは右奥と、左奥のみ、である。ならば
このどちらかが噂のオバケが”出る”場所なのだろう。

「ねえ、どっちから先に行く？」

と提案したのは僕である。

これは暗に三人で一緒に行こう、という意味を含めてのことだった
のだが、次の直樹の一言が全てを打ち消した。

「そ、そうだなあー、二つしかないからグー、パーで分かれて行く
か？」

「な
」

何言っただよ、と言いたかったのだが、それを口に出すにも行か
ず、結局留まってしまった。真逆、まさか怖いから三人で行こう、などと
もいえるまい。

「それじゃ、行くぞ。グーツ、パー・・・・・・・・」

グーパーに因って起こった結果にこれほどまで恨めしく思ったこと
は、この十三年生きてそうなかったように思う。

二人がパーを出し、僕がグーを出したのだ。

一人になってしまった僕が当てられたのは右奥の教室である。日が良く当たり、明るそうな左奥とは違って、此方の方はお世辞にも快適な環境とは言い難そうだ。右最奥まで続く廊下は電気がないため完全な暗闇になっており、完全に光も音も闇に吞まれた世界である。勿論、好き好んで此方を選んだわけではない。2対1では分が悪く、散々言い合った末に二人に押し切られてしまったのだ。

（つたく、こんな時に限って息が揃いやがって）
と再び二人を恨んだが、件の教室前で今更悔いても始まるまい。

「はあゝっ・・・」
八雲はまるで誰かに伝えるかのように大きく溜息を吐いた。
そして腹に力を入れ、

思い切り、ドアを開いた。

第一話 悪五郎、参上（3）

その昔、その昔のことじゃ。

蔵須山^{ぞうすずやま}さ暮らしとった神野悪五郎^{しんのあくごろう}ちゅう”物怪^{もののけ}”がおったんじゃと。

この悪五郎よ、人様^{ひとさま}の態^{なり}をしておるが、人は喰^くらうわ畜生^{ちくじょう}盗^どむわ方々悪さ働きおったんだと。麓^{ふもと}の郷^{さと}の連中困^こらせてばかりおったんじゃわ。

そこでな、郷の連中来る日も来る日も神^{カミ}さんに助けてくれお願いしとったんだと。

そつたらな、山^さン本^{もと}ちゅう天狗様がお天頭様から降^{くだ}ってきおつてな、手に持つ金棒を、こう、ぶわあつて振^ふってな、悪五郎叩^{たた}きのめしおったんだわ。

これでもう悪五郎悪さしねえって郷の連中おっぴら喜^{よろこ}んだちゅうはなしだ。

ん？その後け？

そさなあ、山ン本様は天にお帰りなさつた聞いちよるなあ。なんで
も郷の連中が有り難エ有り難エ云うて祠立てたんだと聞いちよるな
あ。

悪五郎？

ああ、ああ、そうじゃそうじゃ。思い出したわ。

奴はな、確かに山ン本様に打ちのめされたわ。じゃがな、死んだい
うわけではないぞ。

おらが童^{わらへこんろ}の頃に爺^じさまに聞かされた話じゃな、悪五郎は山ン本様に
打ちのめされた金棒にとり憑いたそうな。今でも持ったモンに悪さ
働かせる”狂い棒”なんじやと。

ん？

その棒が何処にあるか、じゃと？

そじゃなああれは

第一話 悪五郎、参上（4）

開いた戸板の先に広がっていたのは、何の変哲もない、普通の教室だった。

いや、正確に言うと、この表現は正しくない。

確かに、造りは他の教室と余り変わりはないかのように見えた。

教室にある物全てがめちゃくちゃに壊されていることを除いては。

「なんなんだよ、この教室……」

少年 神崎八雲は暫し呆然とした表情で、荒れ果てた教室を眺めていた。

教室と言う教室の机や椅子が、まるでゴリラか何かにもへし折られたかのようにいびつな形状になっている。黒板は壁から耑り取るように剥され、教室としての風情すら失いつつある。

此処に、この教室に、何が？

ガササツ

「ん？」

気の所為か、壊れた机の残骸の中で何かが動いた気がしたのである。僕は積み上がった机の中を覗いた。空洞にはなっているようだが、特に中に何があるわけでもなさそうだ。

では、一体何なのだろう。

この、異常な部屋は、

何が起きたと言っのだろう。

一瞬のうちに様々な不気味な説が頭に浮かんだが、自分で考えて怖くなり八雲は考えるのを止めた。

いや、正確には考えないよう努力した、と言う方が正しいかもしれないが。

八雲は基本的にオバケなどという物を信じている訳ではない。怖いものは怖いと感じるが、少なくともこれはオバケではないだろう、という気持ちがある八雲を支えていた。

任は全うしたのだ。早いところ直樹達と合流して帰る

「おい」

第一話 悪五郎、参上（5）

机の下敷きになっていたその男の名は神野悪五郎しんのあくごろう、というらしい。名前もさながら、逆立った髪型に覗かせた胡散臭い表情が益々持つて怪しい。

「いいから、落ち着けよ、ガキ。安心しろお前をとって喰おうとは思ってねえ」

「————!!!!!!」

「・・・っち、うるせえ野郎だな・・・この前来たガキ共も口クな奴らじゃアなかったが」

「あ、あんたは・・・」

「あんたは一体何処の誰なんだ・・・」

「俺か？教えてやろう。俺様は」

大魔王、神野悪五郎様だ、良く覚えとけ。ガキ

そう言い放った男は高らかに笑った。

「……………はあ？……………え……………魔王？」

「そうだ。俺様は三国を又に駆けた神野悪五郎様だ、その俺様がもう数百の単位で閉じ込められてるってエんだから情けねエよなア」

「ちょ、ちょ待て。いやいやいやあんた誰よ」

「……………？だから言ったる。魔王サマだよ」

何故か幾重にも積まれた机の下敷きになっているのに、涼しい顔で返答している。

「いや……………それはないって。あんた、何処から来たの……………って
いうか、大丈夫かよ」

「大丈夫なわけあるか！」

急に男が怒号をあげたので、危うく腰を抜かしそうになった。

「この俺様が、いいかこの俺様がだぞ！？もう何百年もこうして封じられてんだぞ！！！！これが大丈夫でなくて他になんて言い様があるッてんだ！！！！これ以上の屈辱なんてねえよッ！！！！」

「……………はあ」

この男と話をしていると、机に押し潰されて骨は大丈夫かとか、そ

もそもどうしてこんな所にいるんだとか、重要なことが全てどうでもいいように感じられてくるから不思議である。

この男が何故こうも理不尽に怒っているかは良く分からないが、少なくとも今の状態や自分のことを怒っているわけではないということは一応分かった。

「・・・で、本当に大丈夫なの、机の下敷きになってて。手、貸そうか？」

「なあに、どうせ出られたって変わりやしねえし出る気もねえよ」

男は捻くれるように言った。

どうも話がかみ合わない。

「だって、あんた、骨とかさ・・・折れてたりすんじゃない？」

「折れてようと、折れてまいと、こいつから逃れられねえ限りはここから出たって無駄だしな」

男　悪五郎は目の前にあった細長い棒を掲げた。

「・・・何これ？」

「いや、そりゃあな・・・ところでお前、逃げないのか俺から」悪五郎は不思議そうな顔をしてこちらを見ている。

「？何で？」

「・・・いや、だってこの前来た連中は俺の影見ただけで腰抜かしてすっ飛んで行きやがったぜ」

恐らく中浦と笹嶋達のことだろう。

「だってさ」

「だって何だ」

「いや・・・びびったはびびったケド、机の下敷きになってるあんた残して流石に逃げらんねーよ」

「それに・・・」

「それに？」

「あんた、見たところ悪そうな人じゃなさそうだしな。（ちょっと頭が可愛そうなことになってるみたいけど）」

棒に貼られた紙を剥がした

「な．．．．．」
もう、声すら出ない。

悪五郎が弾き飛ばした机の残骸の間に隠れて、朦朧とそんなことだけを考えていた。

「神野悪五郎・只今復活仕る ありがとうよ、八雲ちゃん」
そういうと、悪五郎は邪悪な微笑みを満面に湛えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019e/>

神野悪五郎・只今参上仕る！！

2010年10月25日03時54分発行